

## 「われわれ」の話

齋 藤 一

### 1

圧倒的に美しいテキスト。擁護しがたい主張をするテキスト。こうしたテキストの魅力あるいは魔力をよりよく理解し、それを他者と共有するために、われわれは論文と呼ばれるテキストを書くことがある。無論、論文の「論」とは「すじみちをきちんと整理して説く」<sup>1</sup> ことだから、論文を書くということは、われわれを魅了するうねりやねじれを「整理」することである。こうすると、論文という作法を共有する共同体内では、私が獲得した魅力は他人に伝わる。しかし、その原初の強度は失われる。論文とは、強度を犠牲にして、ある一定の他者と知識を共有し、後の世に伝える一つの手段であるが、こうした手段としての論文に限界を感じ、もっと多くを求めたくなるときもある。

英語圏文学の研究者、中村和恵は次のように述べている。

だいたい現在ロンブンといわれている型式の書きものは、いったいどこから出てきたのか。ロンブンなんて型式の「話」がない文化はいくらでもありますよね。すくなくとも現代日本においてはまったくどうもつけ焼き刃におもえてしかたがない。いまの大学で一般的に推奨され学生や先生たちによって書かれている論文のスタイル自体に、ユーロセントリックな、キリスト教的な、近代主義的な、進化論的な匂いがすることは否めないようにおもわれる。一応ブンガクをセンコウしている、それもマイノリティや植民地主義に関心があります、などと学生向けパンフレットに載せていたりするわたしは、そういうことについて考えないで書くわけにもいかなないようにおもいはじめたわけです。<sup>2</sup>

私のように、『闇の奥』や『ロード・ジム』といった19世紀末イギリス植民地主義のなかから生まれた小説を研究してきた者にとっては無視できない意見で

ある。<sup>3</sup>

では、どのような型式の論文ならば、取り上げる内容とその表現型式とのあいだに齟齬をきたさずすむのか。あるいは、齟齬をきたしたとしても、それが説得力を持って明確に読者に伝わるようになるのだろうか。中村はこうも言っている。「正確なステップで地雷のありかを示しつつ他を生かし自己を主張する、おお、というような論文に出会うこともじつは少なからずある」。<sup>4</sup> じつは私にも同様の経験がある。インドネシアをフィールドとして、人種主義と植民地主義の問題にフーコーの権力論を持ち込むことで支配／被支配という安易な図式に安住することを問題化してきたアン・ローラ・ストーラー (Anne Laura Stoler) の2002年の著、*Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule* (以下 *CKIP* と略記し、頁数を附記する)<sup>5</sup> の第七章を読んだとき、私は小さく「おお」とつぶやいたのだった。

## 2

オランダの植民地であった19世紀末のインドネシアを主たる研究対象とするストーラーは、*CKIP* の狙いを以下のように明示している。

The task is [...] to identify the regimes of truth that underwrote such a political discourse and a politics that made a racially coded notion of who could be intimate with whom – and in what way – a primary concern in colonial policy. (*CKIP*, 2)

この作業は、例えば植民者側から見ると、以下のような問いに答えてゆくことである。

What did it mean to be “European” for colonials who had never set foot in the Netherlands, England, or France? How could children identify with a Dutch homeland when many spoke Dutch less often and with less ease than they did Malay or Javanese? How fixed was the notion of being “European” if a Dutch woman who chose to marry a native man could lose her Dutch citizenry rights because of that desire? (*CKIP*, 12)

こうした問いに答えるために、ストーラーは、オランダ領であったジャワにおける医療マニュアルや言語政策について、豊富な資料を駆使しつつ、この地における被／植民者の複雑な「親密さ」を読み解いてゆく。実際、第1章から第5章まで、読者はこの複雑さに何度も嘆息することになる。ただし、ストーラーは「ヨーロッパ人」のアイデンティティの複雑さにひたすら淫しているわけではない。彼女には確固たる志がある。それは第六章で顕著だ。

“A Colonial Reading of Foucault: Bourgeois Bodies and Racial Selves”と題された第六章は、ストーラーの前著 *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*<sup>6</sup> の要約とも読めるが、確固たるアイデンティティを希求する人種主義に対する著者の立場をはっきり打ち出したテキストとしても読める。例えば、ヨーロッパで台頭する極右の「社会を防衛する」(the defense of society [CKIP,161]) という旗印に注意を促したストーラーは、次のように続ける。

Understanding more fully what joins racisms, biopolitics, and modern states may be one way of participating in doing what Foucault encouraged – the writing of histories that nourish reversals, recuperations, and insurrections within them. The chapter that follows [Ch.7] is an effort in that direction. (CKIP, 161)

こうして読者は第七章におけるストーラーの試みへと導かれてゆく。ただし、私としては、この章の読みどころは、ストーラーの試行錯誤の結論というよりは、むしろその過程であると考えている。彼女はこの章自体をいわば“reversals, recuperations, and insurrections”の表現として書いているのだ。以下、このことを確認するために、CKIPの第七章を分析してみたい。

### 3

“Memory – Work in Java A Cautionary Tale With Karen Strassler”なる、いささか奇妙なタイトルの第七章の第一段落において、著者アン・ストーラーであるところの「私」は、第一章から第六章までの議論を簡潔にまとめてゆく。——ヨーロッパ人と現地人女性との同棲 (concubinage) はオランダ

の行政府によってどう見られていたか。現地人の召使いたちはヨーロッパ人雇  
用者にどう見られていたか。オランダ人女性はどのようによき主婦として形成  
されていたか。そして、なぜこうした認識の形成が植民地統治において重要だ  
ったのか。こうしたことを、「私」は豊富な画像資料をも参照しながら検討し  
てきたのである、と。

ところが、第二段落において、「私」はこうした記述の続きをしようとはし  
ていないことを明らかにする。曰く、この章は二つの意味において回れ右 (an  
about-face [CKIP, 162]) なのだという。第一に、それは分析の方向を逆転  
させることである。つまり、植民地期のインドネシアにおいて、召使いとして  
働いていた現地人の男女が、オランダ人の雇用者たちをどう見ていたのかに焦  
点を変えるということである。第二に、この回れ右は、人類学者ドリス・サマー  
の、収集した資料のアーカイブを利用してさまざまな解釈をおこなう研究者に  
対する戒めの言葉への応答である。

But this chapter is also an about-face of another kind, for it situates  
memories of domestic service by those who served against the density  
of the archives about them. Its tenor and tentativeness responds to  
Doris Summer's injunction that scholars should "proceed with caution"  
in their treatment of colonial narratives, temper their interpretive  
license, and not imagine that all encounters can be unpacked with  
hermeneutic finesse. (CKIP, 162)

この引用部分はただちに「注意ぶかく反省すること」(a cautionary reflection)  
という言葉で要約されているが、その意味は上述の引用で明らかである。当然  
のことだが、研究者の解釈行為で解明しつくせるほど、人の出会いは単純では  
ないのだ。ただし、この章が興味深いのは、書く主体が「注意ぶかく反省する  
こと」を実践していると表明していることそれ自体ではない。反省するだけな  
らだれでもできる。そうではなくて、この反省をテクストレベルで模索しつつ  
実践していることが重要なのである。

この実践は、CKIPにたびたび出現する「われわれ」という人称代名詞にお  
いて特に顕著である。それは、いわゆる「エディトリアル・ウィ」<sup>7</sup> と言  
いがたい場合がある。

Our questions worked around these images: What resonance did these castings have in people's lives? What was remembered by those whose touch, smell, and gestures were the very objects of such aroused recollections? Over a period of nearly two years, we talked with Indonesian women and men who had worked between 1920s and 1950s as gardeners, gofers, kitchen helpers, nursemaids, cooks, housekeepers, and watchmen in Dutch colonial homes. (*CKIP*, 163–164, my underlines)

最初の「われわれの」という人称代名詞は「エディトリアル・ウィ」と言ってもよい。しかし二つめの「われわれ」はそうではない。二年間ほど、インドネシアで調査をおこなったチームのことなのだ。この「われわれ」のアイデンティティについて、ストーリーは本文中では明言していない。しかし270頁の詳細な注によれば、この「われわれ」とは、1996年から翌年にかけて、ジャワ島南部にあるジョグジャカルタ (Yogyakarta) にてインタビューを行った Ann Laura Stoler (アン・ローラ・ストラー、著者) と Karen Strassler (カレン・ストラッスラー、院生 (博士課程)、人類学、ミシガン大学)、そして彼女らの補佐をした Nita Kariani Purwanti (ニタ・カリアニ・プルワンティ、人類学者)、Didi Kwartanada (ディディ・クワルタナダ、歴史学者)、Dias Pradadimara (ディアス・プラダディマラ、院生 (博士課程)、歴史学、ミシガン大学) からなるチームを指すことがわかる。

このチームは、1920年代から30年代にオランダ人の家で働いていた男女と対話を行い、彼/彼女の記憶を記録していった。こうして集められた記憶は、以下のような結論を導きだすことになる。

The memories they chose to recall present a challenge to two prevailing postcolonial stories. One is the popular romance of the beloved and nurturing servant that dominates Dutch memoirs. The other is the story of subaltern memory as the truth of the colonial past. This project adheres to neither. Instead it pushes the accounts of former servants against these Dutch renderings to explore how the dissonance in their perceptions of intimacy and affect may unsettle our certainties about what constituted the colonial and how it figures

in people's memories today. (*CKIP*, 164, my underline)

“Instead”以降を日本語でパラフレーズしてみる。——このプロジェクトは、かつてオランダ人に使えていた人々の語りを、オランダ人の語りに対抗させるものだ。こうすることでわれわれが探求しようとしていることがある。それは、彼ら (servants) とオランダ人との間の親密さの中にも不協和音があったこと、そしてこの不協和音こそが、コロニアルなるものを形作っていたのは何なのか、それが今日の人々の記憶の中でどのように形象化されているのかについてのわれわれの確信 (our certainties) を揺るがすかもしれない。

さて、この引用で注目したいのは“our certainties”という言葉である。もちろんこれは“about”以下のことについて、「われわれ」——ストーリー、彼女のチーム、そして読者——が信じこんでしまっていることを指す。しかし、この章を読み進めていくと、この言葉は「われわれ」という主体の確実さのことを含意しているのではないか、と思われてくる。このことを念頭において、201頁以降を詳しく読んでみたい。

この頁の途中から、“Beyond the Stories We Want to Tell”というタイトルの節が始まる。タイトルの直後に、つぎのような文章が挿入されている。

Ibu Darmo tells us she's eighty-one. With delight I say that my mother is too. She looks at me straight for the first time since we sat down and simply says: “I thought whites [*londo*] were all dead by that age. I didn't know they could live that long.”

Ann's fieldnotes, July 12, 1997  
(*CKIP*, 201)

この引用は重要である。これまでは、テキストを書く主体は、「私」アン・ストーリー、そして「私」の記述をささえるプロジェクトを行った「われわれ」であった。ところが、この節における書く主体はどうか。ここでの書く主体は「私」であったストーリーのフィールドノートを引用し、しかもそれを「私のフィールドノート」ではなく「アンのフィールドノート」と説明している。これはここでの書く主体が「私」=ストーリーではないことを明示するものだ。

もう少し引用を続けよう。

Ibu Darmo receives us in a small sitting room behind her grocery store that opens onto the road. We are uncomfortable that there are five of us, and Dias waits outside. Nita and Didi have met with her before and are not as ill at ease as we are. (CKIP, 201)

この引用中に現れる「われわれ」とは誰なのか。まず、インフォーマントであるイブ・ダルモがいる。その前に「われわれ」五人のチームが「居心地わるくして」いるという。しかしその内の一人であるディアスは部屋の外にいる。この時点で、「われわれ」は五人のチームであるとは断言できなくなっている。さらに、「ニタとディディは彼女〔イブ・ダルモ〕にすでに会っていて、われわれほど居心地が悪くはない」とある。この「われわれ」は、五人のチームからニタとディディを除いた三人、ストーラー、ストラッサー、そしてディアスである。つまり、「われわれ」とはある種の普遍性をそなえた人称代名詞であるどころか、ストーラーを中心とした緊密なチームですらない。むしろ、イブ・ダルモという女性を目の前にして、まさにストーラーが問題としている親密さの違いによって、「われわれ」は瓦解していつているのだ。「われわれ」とは、イブ・ダルモとある種の親しさを獲得しているニタとディディの二人、そうではないストーラー、ストラッサー、そしてディアスの三人のことなのである。この「われわれ」の瓦解は、次の頁においてさらに顕著になる。

We were made to know not only that we were an intrusion, but that there was little point in apologizing for our presence or effusing our appreciation here. In response to Ann's misplaced effort to find some common ground in noting that her mother and Ibu Darmo are the same age, Ibu Darmo halts us with her blunt response: "I don't know londos lived so long." (CKIP, 202)

まず、「われわれは侵入者だった」(we were an intrusion) という言葉も、ストーラーの五人チームのことを語っていると断定してはならない。すでに確認したとおり、ニタとディディはダルモにとって「侵入者」ではないのかもしれないのだから、この「われわれ」はダルモと親密ではない三人のことだと捉えた方がよいだろう。そして、この三人も、その疎外感によってかえって緊密さを強めているというわけでもない。少なくともこの引用では、ストラッサーは

ストーリーの努力、イブ・ダルモとなんとか親密になりたいという試みを「場違いなものだった」と記述しているのだ。もはやストーリーとストラッサーも一枚岩の「われわれ」とは言いがたい。この段落の最後、「イブ・ダルモはぶっきらぼうにこう言いはなつてわれわれを驚かせる。「白人がそんなに長生きするなんて知らなかったよ。」という文章の「われわれ」は、もはや「エディトリアル・ウィ」でも、ストーリー率いる研究チームでもない。その残滓である。

このように、「われわれ」を支える研究チームが、親密とは言いがたい相手の中で、いわばその親密さの度合いによって亀裂を生じてしまうなどということは想像に難くないし珍しくもないが、その亀裂をこのような形でテキストに表現してみせるという例は、それほど多くはないのではないだろうか。

もし自分が査読者ならば、このような未整理の「われわれ」が散乱する論文——いや、第七章は、ストーリーがストラッサーの援助を得て書いた「話」(tale)なのであった——をアクセプトするだろうか、と私は考え込んでしまう。論述の主体を統一していないこのテキストはあくまで「話」であり、論文としては受け入れられないと主張して、安心立命するか。それとも、他者の前で解体していく「われわれ」のテキストも、そのアイデンティティの(構築と)破綻のプロセスを開示することによって、論文の記述の主体をどうするかという問題をわれわれになげかけるものとして、ひとまず受け入れるか。どうやらここで性急な結論を出す前に、われわれは論文の「われわれ」について思考を重ねる必要があるようだ。

※ 本稿は、筑波イギリス文学会(2007年8月30日、於：筑波大学)において行った口頭発表、「文献解題：Ann Laura Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule* (U of California Press, 2002) について」に大幅な加筆修正を加えたものである。

## 注

- 1 『漢字源』(初版〔電子版〕、学習研究社、1993年)。なお、『講談社 新大辞典』(特装版、1993年、講談社)の「字源」には「条里に従い、説くこと」とあり、白川静『字通』(平凡社、1996年)の「形声」には「声符は倫に次序を以て全体をまとめる意がある」とある。「整理」「条里」「次序」いずれにしろ、ねじれやうねりとは対極の言葉である。



- 2 中村和恵「なにとして書くのでいいのだ——ロンブンというブンガク」(『UP』東京大学出版会, 30: 4 (342), 2001), 37頁。
- 3 「しかし, [コンラッド『ロード・ジム』についての修士] 論文完成直後の私〔齋藤〕は, 「政治の美学化」への批判をポストコロニアル批評の文脈でやりとげた, そして西洋植民地主義が生み出した文学テキストにおける他者表象をとにかく批判することで自分の政治的正しさをアピールできた, というささやかな達成感も感じていたと思う。／この達成感はほどなく粉碎された。そして, 私は日本で英文学を研究する者が英文学テキストにおける他者表象を批判する資格があるのかどうか, 考えはじめたのである」(齋藤一『帝国日本の英文学』京都: 人文書院, 2006年, 8頁)。なお, この引用文では研究者の倫理の重要性が強調されているが, 本稿ではその倫理の実戦可能な型式を考察することになる。
- 4 中村, 39頁。
- 5 Ann Laura Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. U of California P, 2002.
- 6 Ann Laura Stoler, *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*. Duke UP, 1995.
- 7 「これは複数形の「わたしたち」という語を, じつは執筆者である単数の「わたし」が縦横に用いるもので, 辞書を見ると主に新聞の社説等で用いるものとして説明されている。論文の書き方マニュアルを見ても英語の論文では日本語よりはっきりそのようであるのだが, 論文というのは先行研究を「ふまえ」(中略), 過去の研究の誤りを指摘する, あるいはそこではまだ言われていなかったようなことをいう, という姿勢が定まっている。つまり事実であり真実であるもの, しかも他の, 過去のことを蹴散らして事実であり真実であるものを, 普遍性を匂わせる「我々」が提示する。こういう姿勢が, ロンブンにはある」(中村, 38頁)。